■ 新刊書

『元原発技術者が伝えたいほんとうの怖さ』（彩流社刊）

小倉 志郎・著

「原発は、ほんとうにとんでもない怪物だ。あの複雑怪奇な原発の構造を理解しているエンジニアは世界に一人もいない…」。本書のまえがきの中で著者はこう述べている。

著者は1941年5月、東京生まれ。慶応義塾大学工学部機械工学科卒、同大学院修士課程機械工学専攻修了。　日本原子力事業（株）（後に、東芝に吸収合併）に入社。その後35年間、現場で原発開発に携わり、主に福島第一原発の４号機を除くすべての号機の安全系ポンプの技術とりまとめ役をした。いわば原子力発電所の見積・設計・建設・試運転・定期検査・社員教育に至るまでのスペシャリストといえる。

本書は、２部にわかれ、１部は「元原発技術者が言える原発の危険性」、２部「事故のあとだから言えること」。巻末の資料には、①「原発を並べて戦争はできない」②紙芝居「ちいさなせかいのおはなし」③内部被ばくについて基礎知識を得るための参考書の紹介—が付記されている。

著者が3・11福島原発事故に遭遇したのは、中央区でおこなわれた「中央区平和プラザ２０１１平和をねがう中央区民の戦争展」の会場。実行委員として参加していた時で、イベント開催中の午後２時過ぎ、突然大きな揺れにおそわれた。

首都圏は夜になってもＪＲなどほとんどの主要交通機関が全面不通となり、著者は横浜の自宅に帰れず、その日は会場に泊まらざるを得なかった。会場に備え付けのテレビでは東北地方の太平洋沿岸を大津波が襲い、東電福島第一原発が電源を失い、原子炉の冷却ができなくなっている、という衝撃的なニュースが流れていた。

「そんなはずはない。非常用ディーゼル発電機があるではないか」

万が一の備えとしての発電機が止まるとは、まさに想定外のことで頭の中が真っ白になった

その後、福島原発第１、２、３号機がメルトダウン。福島県内のみならず、関東周辺の山林、海域は現在も放射能によって汚染され続けていることは読者もご存じのとおりだろう。今回の福島原発の事故に際し、著者は、「原発をエネルギー資源の少ない日本にとってまるで“救世主”であるかのような夢を見て疑わなかった。元技術者として私自身、痛切に責任を感じている」と述べている。

2002年東芝を定年退職したのちのこと、著者は、2008年末に知人から贈呈された２冊の論文（１．Jay M. Gould & Benjamin A.Goldman 著、肥田舜太郎・斉藤紀訳「死にいたる虚構－国家による低線量放射線の隠蔽－」、２．Donnell W. Boardman 著、肥田舜太郎訳「放射線の衝撃－低線量報謝線の人間への影響(被爆者医療の手引き)」）を読み、これまで予期して来なかったこと、すなわち、内部被ばくによる低レベル放射能であっても、人体に多大な影響を及ぼすことを知り、直ちに全ての原発の運転を停止すべきだという認識に達した。

著者は、3・11事故が起こる4年前に『原発を並べて戦争ができない』という小冊子をつくり、原発の危険性を警告してきた。その理由は、何よりも原発の冷却システムが非常に複雑でいたる所に弱点があるからで、日本が地震や津波にあう確率の高いというばかりではなく、原発が小人数のテロリストの攻撃に対してすら防ぐ手だてがないからだと指摘している。

放射能の危険性が子どもにもわかるように、紙芝居『ちいさなせかいのおはなし』をつくり、2011年3月5日に千葉県鎌ヶ谷市で初上演を行った。3・11事故が起こる６日前のことだった。

本書の中で、著者が自責をこめて述べていることだが、その第２部「事故の原因—天災か人災か？」の中で、3・11事故が起こるはるか前から事故を、未然に防ぐことができたチャンスが少なくとも５度あったと指摘している。

「2008年、東電内部の津波の検討により福島第一原発を3・11事故並みの津波が襲う可能性があることを把握した。この結果にもとづき、安全が確認できるまで、福島第一原発を一時休止することができたはず」（第４のチャンス）—などと指摘した。こうしたことを踏まえ著者は、「したがって、事故のほんとうの原因は政府と東電が何度も大事故予防のチャンスを逃していたことである」と批判している。

●四六版２２４ページ　定価：１７００円＋税
●彩流社：０３（３２３４）５９３１